

「単独者」の基本理解

谷塚 巖

1. はじめに

本稿では、キルケゴールの「単独者」が、基本的にどのように理解されるのかについて検討する。「単独者」の問題は、それがどのように表現されるにせよ、キルケゴールの本格的な著述活動がそこからはじまり、そしてそこに終わるキルケゴールの思想の根本をなすものである*1。キルケゴール自身も、著述活動の中期にあたる1847年に、次のように述べて、「単独者」の問題が、著述家としての自らの活動を決定づけてきたことを確認している。

私にとって、すなわち、私事的にではなく、思想家としての私にとって、単独者をめぐるこの問題は、もっとも決定的なことである。(SKS 16, 94) *2

では、ここで述べられているような、思想家としてのキルケゴールにとって決定的な「単独者」とはどういうことなのだろうか。本稿では、キルケゴールが、個人的な問題としてではなく、思想家として「単独者」が重要であったと述べている点に注目することにしたい。個人的な問題としてすぐに思い浮かば

*1 キルケゴールがはじめて「単独者」という語を用いたのは、1843年5月16日に出版された『二つの建徳的講話』の序文においてであり (hiin Enkelte; SKS 5, 13)、そして最晩年の執筆になる『瞬間 第5号』(1855年7月27日)においても、「単独」(Isolation)ということが「新約聖書のキリスト教」との関連で問題にされている (SKS 13, 233-234)。

*2 本稿で用いられる著作集は批評版キルケゴール全集である。Søren Kierkegaards Skrifter, bd. 1-28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, København, Søren Kierkegaard Forskningscenteret og G. E. C. Gads Forlag, 1997-2013. 引用箇所は、慣例に従って、SKS、巻数、頁数の順で示す。翻訳に際しては、英訳プリンストン版、独訳ヒルシュ版も参照した。

れるのは、キェルケゴールの父やレギーネとの関係、そしてコルサー論争であるが、本稿ではキェルケゴールの言明に即して、個人史的な問題には触れないことにする。

とはいえ、思想家としてのキェルケゴールにとって「単独者」が決定的であったという場合、このことは、キェルケゴール自身の実存の問題でもあったと受けとめなければならないだろう。キェルケゴールは、そのさまざまな著述活動を通して、思想家というものは、自分が考えているまさにそのものとして生きなければならないということを繰り返し述べているからである*³。「単独者」とは、キェルケゴールにおいて、「単独者」という新しい思想があるというようにして考えられていたものではなく、キェルケゴール自身が、まさにそうであるような、実存の問題として考えられていたものにほかならない。

こうした、キェルケゴール自身の実存でもある「単独者」の思想を見ていくにあたって、本稿では、特に『私の著述家－活動の視点－ある直接的伝達、歴史への報告―』*⁴の「付録」を取り上げることにする。この著作は、キェルケゴールの死——1855年11月11日——から約4年後の1859年に、兄のペーター（Peter Christian Kierkegaard: 1805-88）によって出版され、一般に知られるようになった。死後出版という形ではあるが、自身の著述活動について読者に「直接的に」弁明するために、キェルケゴール自身によって生前に準備されていたものである。本稿で、この著作の最後に付された「付録」を取り上げるのは、キェルケゴールの著述活動の中で、「単独者」がどのように問題になっていたのかが述べられているからである。「付録」の表題頁にも、「『単独者』——私の著述家－活動に関する二つの「注記」——というタイトルが掲げられている。「単独者」を理解するためには、まず、これらのテキストを参照することがふさわしいだろう。

*³ たとえば、1847年の日誌では、「自分の思惟を弁証法的に自ら二重化する」ということに関連して次のように言われている。「本の中の弁証法は、単に思惟の弁証法にすぎない。しかし、この思惟の二重化（Reduplikationen）は、生における行為である。ところで、自らの思惟の弁証法を二重化しないあらゆる思想家は、錯覚を絶えず展開する」（NB: 201; SKS 20, 119）。

*⁴ SKS 16, 5-106; *Synspunktet for min Forfatter-Virksomhed: En ligefrem Meddelelse, Rapport til Historie*

この「付録」は、「序文」と「あとがき」との間に、二つのテキストが配置された構成になっている。一つ目のテキストは、「No. 1「かの単独者」という献辞に対して」と題され、1846年頃から書き始められたとされる*5。タイトルにある「かの単独者」というのは、キルケゴールのいわゆる宗教講話の序文において用いられていたものであり、キルケゴールの著述活動がキリスト教という宗教的な文脈において、「単独者」のためになされたということが強く示唆されている。二つ目のテキストは、「No. 2「単独者」に対する私の著述家－活動の関係についてひと言」と題され、1847年頃に執筆されている。タイトルからも明らかのように、キルケゴールのそれまでの著述活動の全体が、「単独者」に関係づけられていたことが示されている。

以下では、まず「単独者」という語彙的な意味を確認したあとで、それぞれのテキストから重要な論点と思われるものを取り上げて、キルケゴールが、「単独者」ということで何を問題にしようとしていたのかについて検討することにした。この検討を通して「単独者」の基本理解に達することが、本稿の課題である。

2. 「単独者」と「読者」

2-1. hiin/den Enkelteの意味

これら二つのテキストにおいて用いられている「単独者」のデンマーク語は、一つ目は hiin Enkelte、そして二つ目は den Enkelte である。Enkelte は、デンマーク語の形容詞 enkelt から派生した語であり、共性名詞の前につく、hiin という指示代名詞や、den という定冠詞（あるいは指示詞）をともなって、主に人物を指す名詞となる*6。形容詞 enkelt は、たった一つである、というこ

*5 キルケゴールのテキストの成立史に関わる文献学的な背景については、批評版キルケゴール全集の注釈を参照。sks.dk/SFV/txr.xml (2017年11月アクセス)

*6 デンマーク語については次の文法書を参照。Tom Lundskaer-Nielsen & Philip Holmes, *Danish: A Comprehensive Grammar, 2nd edition*, Routledge, 1995, 2010. なお、hiin は、「かの」という意味で、話者から比較的離れた対象を指す指示代名詞として用いられていることは明らかであるが、一方の den は、定冠詞として用いられているのか、それとも対義語の「この」という意味で、指示詞として用いられているのかについては、これらのテキストからだけでは明らかではない。いずれにしても、

とを意味し*7、それが名詞化すると、「たった一人の者」、「個別者」あるいは「単独者」という意味になる。hiin Enkelteかden Enkelteのどちらで用いられるにせよ、「単独者」が意味していることは自明だろう。

2-2. 「大衆」は不真理である

しかし重要なのは、この「単独者」をめぐって、キェルケゴールが読者を巻き込む独特な方法で議論を展開していることである。「[かの単独者]という献辞に対して」と題されたテキストでまず注目されるのは、キェルケゴールの「弁証法的」な論じ方であろう。ここでいう「弁証法」とは、キェルケゴールの読者に対する対話的な論じ方、そして、論じ方そのものにおける、否定の同意を求めるような議論の展開の仕方である。

キェルケゴールはこのテキストにおいて、宗教講話でそうしていたように、まず、読者に対する語りかけからはじめている。「親愛なる読者へ！この献呈を受け取ってください」(SKS 16, 86)。このテキストでは、「読者」である「あなた」に対して、直接かつ親密に語りかけるような文体がきわ立っている。これは、読者をこれから展開する議論の中に引き込むためのレトリックである。読者はこのような語りかけによって、キェルケゴールの言葉を聞くように促される。このようにして、対話的状况の前提が作り出されるのであるが、この対話的状况の成否は、キェルケゴールに対して読者がどのように応答するかにかかっている。

ここでの主題は、キェルケゴールが「倫理的なもの」および「倫理的-宗教的なもの」と同格におく「真理」の判定規準*8が「大衆」にあるのか、それとも

研究史においては、キェルケゴールの思想的深化にともなって、hiin Enkelteの個人的な意味合いが徐々に薄れ、より理念的なden Enkelteへと成熟していったということが言われている。大谷長『キェルケゴールに於ける授受の弁証法』、東方出版、1953年、119-197頁、氣多雅子「宗教は私的な事柄であるか」『哲学研究』、第576号、2003年、京都哲学会、1-43頁。

*7 C. Molbech, *Dansk Ordbog indeholdende det danske Sprogs Stammenord tilligemed afledede og sammensatte Ord*, Kjøbenhavn, Glydendalske Boghandling, 1859, Første Deel, S. 443f.

*8 "Instantsen" SKS 16, 86.

そうではないのかということである。「倫理的なもの」や「宗教的なもの」と同格におかれていることからわかるように、「真理」は——キルケゴールは、この「真理」を、「生」や「道」と同義の関係においている*⁹——、生き方の問題として考えられている。まず、二つの人生観が対比される。一方には、「大衆が存在するところにはまた真理も存在する、と考える一つの人生観」(SKS 16, 86)がある。そして他方には、「大衆が存在するあらゆるところに不真理が存在する、と考える別の人生観」(ibid.)がある。キルケゴールは、この後者の人生観を、「「大衆」は不真理である」と定式化し、これを同じテキストの中で6回以上も反復的に用いて、「大衆」がいかに「不真理」であるかを論じるのである。

こうした論じ方の狙いは、「大衆」というあり方が、とりわけ新約聖書で言われている「真理」からいかに逸脱しているかということ、「読者」に示すことにある。キルケゴールが想定する「読者」とは、もちろんデンマーク語を解し、聖書で言われていることを知っているキリスト教徒である。したがって、キルケゴールが、「真理」という言葉を持ち出すとき、読者はそれを聖書で言われている意味で受けとることになる。では、「大衆」として存在のあり方は、そのような「真理」であるのだろうか。キルケゴールは、このことを読者に対して否定的に問いかける。読者が否と反応してキルケゴールに同意すれば、残るのはそれに対比される「単独者」しかない*¹⁰。つまり、「真理」は「単独者」としての存在のあり方にあるということに読者は同意させられるのである。このようにして、読者は、自分が「単独者」であるのかどうか問われることになる。あるいは、より正確にはそのことを自分で問うことになる。そし

*⁹ SKS 16, 86. キルケゴールがヨハネによる福音書第14章6節のイエスの言葉に依拠していることは明らかである。「イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(新共同訳)。http://sks.dk/SFV/kom.xml#k385(2017年11月アクセス)なお、キルケゴールは、この付録の「あとがき」で、真理それ自体をイエス・キリストと見なしている。SKS 16, 105.

*¹⁰ Enkelte に対比されるデンマーク語は Mængde である。この語は「大きな量」を意味するが、Mængden という後接定冠詞がついた形で、「民衆や群衆の最も大きな部分」を意味する。Molbech, op. cit., Anden Deel, S. 147. 本稿では「大衆」という訳語を用いる。

てこの対話的狀況をつくり、「単独者」へと読者を誘うことこそがキェルケゴールの最終的な狙いなのである。

3. キェルケゴールの著述活動と「単独者」

さて、以上より、「たった一つの」という意味を持つデンマーク語の形容詞から派生した名詞「単独者」が、キェルケゴールによって、「大衆」との対比で特別な意味で用いられていることについてみてきた。ここでいう「大衆」とは、キェルケゴールにとっては、量的な数として把握された抽象的なものである^{*11}。それが問題なのは、「後悔」や「責任性」といった、人間が「ただ一人」でしか負うことかできないとされるものが問えなくなるからである^{*12}。キェルケゴールからすれば、後悔できるのは、それに至る選択をなしたその人のみであり、その責任もその人にしか問うことができない。それゆえに、キェルケゴールが「単独者」という場合、そこではまず第一に、そうしたことをただ一人で負うしかない人間存在の根本的な孤独が考えられているということが出来る^{*13}。

いずれにしても、思想家としてのキェルケゴールの課題は、読者に対して、その人がキリスト者であるならば「この単独者」にならなければならない、ということ問うことにある。「単独者」に対する私の著述家－活動の関係についてひと言」と題された二つ目のテキストでは、キェルケゴールが「単独者」というカテゴリーに読者の注意を引かせるために、著述家として特に努力したということが強調されている^{*14}。そして、キェルケゴールは、これを時代に即した最も確実な手段を用いて遂行したと述べる。

しかし、何らかのことに影響を及ぼそうとする者なら誰でも、自らの時代を知っていなければならない。そして、最も確実な手段を用いる危険を覚えておかす勇気を持たなければならない。これを私は用いたのである。

* 11 SKS 16, 87.

* 12 SKS 16, 87-88.

* 13 ただし、「救い」も、まさに「単独者である」ことにあると考えられている点も強調しておかなければならない。SKS 16, 97.

* 14 SKS 16, 96, 99, 104.

「単独者」の弁証法を二重の運動においてつねに両義的にしながら。(SKS 16, 95)

では、キルケゴールの時代評価、そして、その上で用いられた「最も確実な手段」とはどういうことなのだろうか。

キルケゴールは自らの時代を、混乱の時代と呼んでいる^{*15}。つまり、あらゆる宗教性の第一条件である「ただ一人の人間である」ということが、「人類」^{*16}や「空想的なさまざまな社会規定」に埋もれて顧みられなくなっていることを、宗教にとっての混乱の時代と見ている^{*17}。

当時のデンマークは、「時代の要求」という標語の下に、政治体制の変革や教会改革、あるいは精神生活の向上などが求められていた時代であった^{*18}。問題は、ここに、キルケゴールが「汎神論的混乱」とも呼ぶ^{*19}、神をいわば軽視する傾向があらわれていたということである。神よりも人間性を重んじる思潮の浸透が認められたわけである。キルケゴールはこのことを、神からキリスト教に対する所有権をだまし取り、あたかも人類（人間性）が、キリスト教をつくり上げたかのようにされていると表現している^{*20}。

したがって、「単独者」というカテゴリーが「時代の要求」に対抗する標語として掲げられるとき、そこには、失われつつある人間の神に対する関係を、「ただ一人である」ことによってもう一度回復するという意味が込められていたとすることができる。人間とは、「単独者」としてただ一人、すなわち、世界においてただ一人であり、神とまっすぐに向かい合っただけ一人なのであ

^{*15} SKS 16, 97. キルケゴールはまた、この時代を「解体の時代」とも呼んでいる。SKS 16, 99.

^{*16} "Menneskeheden" 「人類」のほかに「人間性」とも訳される。なお、同時代の辞書では、ドイツ語の Menschheit に相当する比較的新しい語として紹介されている。特に人類の道徳的あるいは精神的な教養という観点で用いられるということである。Molbeck, op. cit., Anden Deel, S. 79.

^{*17} SKS 16, 97.

^{*18} 「時代の要求」については注釈を参照。http://sks.dk/SFV/kom.xml#k540 (2017年11月アクセス)

^{*19} SKS 16, 103.

^{*20} SKS 16, 101.

る」(SKS 16, 103)。キェルケゴールがここで見ているのは、神への従順という人間存在の本来のあり方にはかならない*21。「単独者」は、その意味で、「キリスト教的に決定的」なのであり、「キリスト教の未来にとっても決定的」なカテゴリーとされるのである*22。

そして、キェルケゴールの著述活動は、まさにこのことを伝えるためになされていたのである。しかし、問題は、キェルケゴールが取り入れたその方法である。

キェルケゴールの著述活動は、一方において仮名による美的著作として、他方において実名による宗教的著作として結実している。キェルケゴールが「「単独者」の弁証法」と呼んでいるのはこの二重性にかかわっている。すなわち、「単独者」は、哲学的な仮名著作(1843-46)においては、美的に規定された優れた意味での「単独者」であり*23、それは、「私」という第一人称単数で語る仮名たちである。読者は、彼らの「尊大さ」に触れて反発させられる*24。一方で、建徳的な実名著作(1843, 1844)において語りかけられている「単独者」は、誰もがそれになることができるものであり*25、それは、「あなた」である読者である。読者は、そこでは、「謙虚な」文体によってなだめられる*26。「「単独者」は、すべての者のなかで唯一の者を意味することができ、また「単独者」は、あらゆる者を意味することができる」(SKS 16, 95)。キェルケゴールの「単独者」とは、読者をこの二重性によって揺さぶり、キリスト者として生きることがどういうことなのかを、読者自身によって気づかせるための倫理的カテゴリーなのである*27。

*21 SKS 16, 103. なお、デンマーク語では、「聞く」も「従う」も、同じ *at lyde* という動詞で表される。Molbech, op cit., Første Deel, S. 1153f.

*22 SKS 16, 101.

*23 SKS 16, 95.

*24 Ibid.

*25 Ibid.

*26 Ibid.

*27 「単独者というカテゴリーには、私にとって可能な倫理的な意味が無条件に結びついている」(SKS 16, 99)。

4. むすび

以上より、キルケゴールの「単独者」を、『私の著述家－活動についての視点』の「付録」を参照しながら検討してきた。「付録」の各テキストが書かれた時期が1846-47年であるために、著述家としての活動も、それまでのものに限られるが、キルケゴールが「単独者」をどのような問題として考えていたのか、その基本はつかむことができたろう。

「単独者」は、キルケゴールにおいて、キリスト者であるならば当然そうでなければならないような存在のあり方として考えられている。すなわち、「たった一人」ということである。キルケゴールに特有なのは、このことが、新約聖書を根拠にしているということである。それゆえに、「単独者」は、あくまでも宗教という領域に限定されたあり方として考えられていたと言わなければならない。

しかし、強調しておかなければならないのは、「単独者」は、キルケゴールの、ある意味では独特な聖書解釈によっているということである^{*28}。そうした解釈が神学的にどのように評価されるかは判断の分かれるところだろう。時代の「大衆化」や「政治化」に対抗するために、新約聖書から「単独者」というカテゴリーを導き出していることは特筆に値するが、聖書がそのことのみを語っているとまでは言えないだろう。「単独者」の問題は、キルケゴールも示唆しているように、あくまでも時代の文脈との関係で提出されたものなのである。

*²⁸ キルケゴールが「単独者」を持ち出す際に念頭においているのはパウロである。「なぜなら、「大衆」は不真理だからである。それはパウロが、「ただ一人だけが目標に到達する」と述べているように、永遠に、神的に、キリスト教的に妥当する」(SKS 16, 86)。また、パウロのローマ人への手紙第1章1節の ἀφωρισμένος εἰς εὐαγγέλιον を引用した、「キリスト教の生 (chr Liv) は、アフォリズムという固有の性質を持つ」(SKS 18, 27) という1839年の初期の日誌記述や、「パウロは、選出された者 (en ἀφωρισμενος) であることについて語っている」(SKS 20, 172) という1847年の中期の日誌記述からは、「単独である」ということが、少なくともパウロの宣教との関連で考えられていたことが窺える。キルケゴールとパウロとの関係についてはより詳細な検討が必要だろう。なお、ローマ人への手紙については次の注釈書を参照。C.E.B. Cranfield, *A Critical and Exegetical Commentary on The Epistle To The Romans, vol. 1*, International Critical Commentary, T&T Clark, 1975.

Kierkegaard and ‘the Single Individual’

Iwao TANIZUKA

By the time of 1846 and 1847, Kierkegaard looks back into what his tasks had been as an author, and acknowledges that his authorship had been aiming at making people aware of what it is to be a Christian: to be this single individual. He even stresses how decisive this was for his entire authorship: “[to] me, not personally but as a thinker, this matter of the single individual is the most decisive.” (SKS 16, 94; *POV*, 114)

The aim of this article is to articulate the basic understanding of ‘the single individual.’ By examining his statement, “not personally but as a thinker,” this article explores ‘the single individual’ mainly through his post-humous publication *The Point of View for My Work as an Author*. At the end of the book, an appendix entitled “The Single Individual” is attached, and this appendix is the focus of this article.

‘The single Individual’ (den Enkelte) literally means to be alone by oneself, i.e., to be solitary. However, Kierkegaard coined this adjectival noun to mean what he himself calls a decisive Christian category. If one is to be a Christian in the age of ‘pantheistic confusion,’ one can be so only through becoming ‘the single individual.’ Only in this way can the relationship with God be restored. His authorship was aimed precisely at this; but it was done surreptitiously, attempting to lure the readers into ‘this single individual.’